

【4歳児 1月の事例】

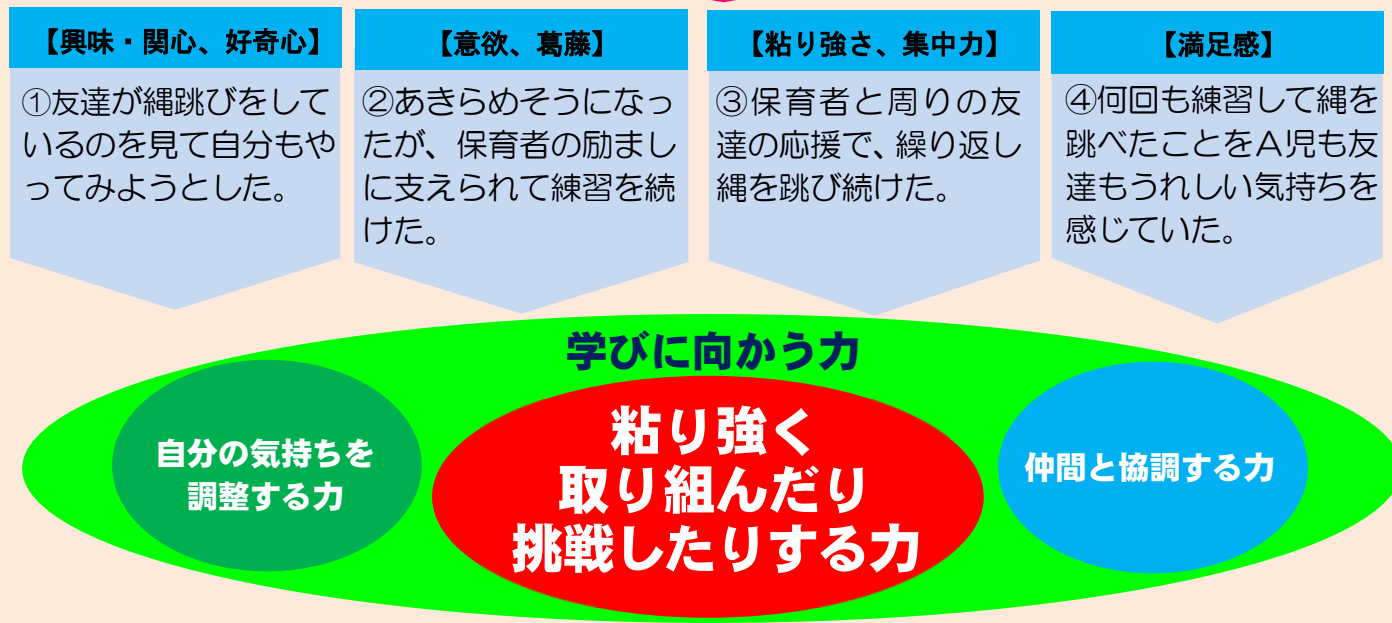
初めての短縄跳び、友達の中で自分もやってみようとする

「先生、できたよ」

- ① A児は、戸外へ出て行き縄跳びをしている仲良しのB児の所へ行った。B児は、A児が近づいてきたことに気付かず、縄跳びを片付け始めた。A児が「ええっ、やめちゃうの。やろうと思ったのに…」と言うと、B児が「あっ、じゃあ、やろうかな」と言ったので、A児はB児の隣に行き跳び始めたが、縄を回さずにピョンピョン跳ぶばかりだった。
- ② A児の様子を見た保育者は、A児の近くに立って「まわして・びよん、まわして・びよん」と言いながらゆっくり縄を回しながら跳んで見せた。A児は、保育者をじっと見ていて、ゆっくりと縄を回したが、うまく跳べなかった。そのうちに、A児は、隣でピョンピョンと跳んでいるB児を見て、表情を曇らせた。保育者が「Aちゃん、がんばれ、そうそう、前に来たら、びよん、だよ」と、声を掛けて応援していると、周りで縄跳びをしていたC児・D児・E児が、「先生見て、こっち見て、見て」と、寄って来た。
- ③ 保育者は「ねえねえ、Aちゃんを見て。もうちょっとだよ」と、声を掛けると、B児・C児・D児・E児が、それぞれに自分の縄で「ここにきたら、びよんってするんだよ」「こうだよ、こう」と、やって見せながらA児の応援を始めた。A児は真剣な表情になり、引っかけながらも繰り返し練習した。
- ④ 何回も練習しているうちに、やっと、A児が1回跳ぶことができた。それを見ていたE児が「やったやん」と、自分のことのようにジャンプして喜んだ。A児は、ほおっと息を吐いて「先生、できたよ」とにこにこして言いながら保育者のところに走ってきた。保育者は「よく、がんばったね。すごいよ」と言いながらA児を抱きしめ、一緒に喜んだ。A児は、にこっと笑って、再び縄跳びの練習を始めた。



幼児の姿から『学びに向かう力』を読み取ると…



学びに向かう力を育むための手立て

環境の構成のポイント

「友達と近くで自分なりに根気よく取り組むことができるようにしましょう」

- 友達が近くで同じようにしていることが、根気よく取り組むために、とてもよい刺激となります。
- 縄跳びを始めたばかりの幼児は大きく振りかぶって、肩全体を使って回します。前のめりになって跳ぶので、だんだん前へ進む傾向もあります。幼児同士の縄がからみ合わないように広い場所を確保して行いましょう。



保育者の関わりのポイント

「やってみようという気持ちをしっかり支えながら楽しい雰囲気に行きましょう」

- 保育者や友達の影響を受けやすい時期なので保育者も縄を持って一緒に加わり、個々の取組の過程を把握して、跳ぶ楽しさが十分に味わえるように行いましょう。
- 二つ以上の動作の協応ができるようになるこの時期には、いろいろなことに挑戦しようという気持ちが芽生えます。ゆっくりと落ち着いて縄を回せるようなリズムで保育者が調子をとって声を掛けると、跳ぶタイミングをつかんでいきます。そして、何回跳べるか挑戦したくなります。保育者は跳び方のコツをアドバイスしたり、個々の目標に応じて跳ぶ数をその場にいる他の幼児と一緒に数えたり、応援したりしながら楽しい雰囲気、根気よく取り組めるように行いましょう。

家庭での関わりのポイント

「幼児のチャレンジを応答的な関わりで支えていきましょう」



- 鉄棒、縄跳び、うんてい、ブランコの立ちこぎ、自転車乗り等、幼児はできそうになると、「見てて」とせがみ、何度も繰り返しやってみたくくなります。このような時期には、幼児にしっかり付き合う時間を見つけてあげてください。
- 自分からやってみようとする気持ちを認め、幼児のやる気や意欲をしっかりと支え、励ましながら見届けることが、生涯にわたって主体性、集中力や根気をもつ人になる基礎となります。そして、できたときに一緒に喜び合うことが親子の絆を深め、豊かな感性を育みます。